

かもいろ

冬号
Vol.16

特集

この冬は加茂のラーメンを食べつくす



TAKE FREE(無料)

小京都 みいつけた



屏風
加茂市は江戸時代末期から屏風の産地で、明治、昭和には「加茂屏風」として全国に販売されるようになりました。
屏風は七世紀頃に中国から朝鮮半島を経て、朝廷に献上品として入ってきたといわれています。中国式の屏風は板で作られ、革紐でつなげていました。日本で現在の屏風になったのは平安時代中期頃。革紐に代わり和紙の丁番（前後に折り曲げるために取り付ける部品）でつなぐ日本独特の技術で屏風全体が一続きとなる大画面が実現。屏風絵を描いた調度品や、目隠し、隙間風除けとして家庭にも普及していきました。
今では伝統技術を守りながら、現代の生活スタイルに合ったデザインの新屏風も生まれています。
株丸川勇平商店は明治時代に加茂市の特産品「和紙」の販売を始め、柿渋を紙に塗った「渋紙（紙のカーペット）」の製造卸を行い、その後、建具と渋紙張りの技術を合わせた屏風を造るようになりました。

※撮影／株丸川勇平商店
(加茂市若宮町1-9-6)